

# 倫理学の特殊性にかんする検討（その一）

—D. D. R. における哲学的討論を中心として—

渡 辺 義 晴

## I

さいきん数年間 D. Z. f. Ph. 誌上を中心にあらわれた倫理学にかんする諸家の論文をまとめてよんでみた。その主要なものをあげると、H. Reinhardts und J. Schmollack, Zur Entwicklung der marxistisch-lenistischen Ethik in D. D. R., D. Z. f. Ph. H9/1960, Zu einigen Auffassungen über den Ursprung der Moral und über das Autonomie- und Heteronomie-problem in der marxistischen Ethik, D. Z. f. Ph. H7/1960, R. Miller, Franz Loeser und die marxistische Ethik, Teil I, H1/1959, Teil II, H3/1959, F. Loeser, Zu einigen Grundproblemen der marxistischen Ethik, H6/1958, P. Olivier, Gedanken zu einer Grundlegung der sozialistischen Ethik, H5.6/1959, そのほか H. Boeck, Zur marxistischen Ethik und sozialistischer Moral, Berlin. 1959 などがある。

認識論・論理学・哲学史等の研究論文にくらべて倫理学にかんするそれは、社会主義国においては比較的すくないということは一般的だと思われる。しかし、こんど諸家の論説を勉強しているうちに、あたらしい傾向に気づいた。研究者のあいだで、倫理学の今日的役割の大きなることについて急速な自覚がひろまっているということである。しかもその主要な問題が、そもそも倫理学は学としてどうして可能であるかという根本問題なのである。つまりまったく新しくこの学問を建設するかのような心意気がくみとれる。これは学者たちのとらわれない論争スタイルとともにひどく筆者の興味をひいた。と同時に、ひとごとではないとおもったものである。われわれのあいだでも批判的大衆のなかから新しい人間の典型がかなり明確なかたちであらわれつつある。これをうんと研究し概括しなくてはならない。体制側の異常なほど熱心な「道徳教育」に、消極的にたちむかっことがすむというときには今はない。もちろん教育の問題はひろく社会科学の研究を前提にしなくてはならないが、倫理学がまずしやんとしなくてはならないのではないか。そこできわめて偶然的な機縁だとはいえ、D. D. R. の哲学者の討論を理解し評論することをもって筆者自身の倫理学の特殊性研究の序論にしたいと考えたのである。ところで、その討論であるが、そのきっかけをなしたのは Matthäus Klein (D. Z. f. Ph. の Chefredakteur) の問題提起であったということができる。それはかなり以前にベルリンで開催された Konferenz des Lehrstuhls Philosophie des Instituts für Gesellschaftswissenschaften beim ZK der SED über theoretische und praktische Probleme der sozialistischen Moral. 1957 のさいに会議の基調報告として提唱された Klein 説の評価をめぐる議論が展開されたとみられるからである。そこで Klein が何を訴えたかを理解しなくてはならない。

さてその紹介にはいる前にこの会議の特殊性について述べておきたい。それは SED 附属の社会科学研究所哲学部の主催、議題は社会主義倫理の理論的実践的問題点。多数の哲学者社会学者だけではなく、教師、技師、軍人、法官、学生、労働者、農民、青年、婦人など各方面のひとが討論に参加している。だからふつうの意味の学会ではなく、Moralkonferenz とよばれたりしているようである。そういう学者ではない活動家代表も多数の報告をだしているが、理論的見識は低くない。いやこういう学会の理論生産上の意義について反省することはもうわれわれの問題にもならねばなるまい。活動家の報告はどれも興味ふかい。倫理学は何を問題にすべきかを考えさせるものとなっている。圧倒的なおもみをもっているのは労働道徳である。倫理学の理論問題との関連を念頭におきながら、任意に若干の報告について紹介しておこう。（青木書店発行「社会主義道徳論」はその邦訳 Klein 報告を含む）

クナップロードの褐炭露天掘、煉炭製造工場（国営）の実例にもとづく青年技師の報告。この作業地は天候条件にめぐまれないときが多く、労働は苦しいものであるが、作業班 Brigad の労働者は屈せず働いている。石炭運送を維持するためには、どんな酷寒のときにもどろんこになって軌道を据えたり、埋った軌道をひきあげ石や木材で支柱をつくる。貨物脱線の復旧作業のときなど電気工や運転手なども含めて、多数の勤労者がときには24時間ぶっとおしの自発的労働をする。このひとたちは例外なく褐炭生産の社会主義的意義を認識している。ところがときには党や組合の指導部でさえ、こういう献身労働のなかに示される新労働道徳をみのがしている。かれらがよく働くのは、報奨や超勤手当の魅力によるくらいに考える。労働道徳をたかめていかねばならない。それにはその阻止的要因になっている経済的制度的欠点をなくすことはもちろん大切である。賃金制度の不合理（多くは同一労働同一賃銀の原則にかかわる）、生産計画労働力計画作成の非科学性を是正する等々。しかし勤労者の意識・意欲或いは道徳に着眼することが肝要である。班長や技術者と労働者との同志関係の促進、労働者提案制度等々。成績のよい Brigad が同時に社会主義的道徳においてすぐれていることを重視しなくてはならない。逆に労働生産性を阻止するものとしてブルジョア道徳（利己心嫉妬心等）があり、これが決して軽視できない。青年労働者のなかには、そのみちの教育を身につけてしまうと西独に横目をつかったり、収入のよさそうなところを求めて転職したがるものがある。生産手段の社会化された関係を過信することはできないし、一方ブルジョア道徳のつよい影響を軽視してはならない。

ノイブランデン州の農村で長期実習をした学生の報告には社会主義下の農民の或る側面について問題提起をおこなっている。農民はみな労働規律にしたがい供出成績もよく客観的には建設にちやんと寄与している。ところでそういう人びとのなかには立派に働けば自分にとくになるし「他人」に対しても強くなれると考えている人が多い。そのさい「他人」のなかには農業生産協同組合や機械トラクターステーションのような国家機関もはいるのだ。報告者は或る働き手のつぎの談話を引用している「おれはよく聞いたものさ、共産主義になれば人間は毎日すこしの時間働けばいい、ものがふんだんにあるんで誰もすきなだけもらえるんだとね。だがそれはできないことよ。だって、そうなれば、人間はごちそうをくらって、いい気になり、街をほっつくだけになろうよ。酔払ってどぶにおっこちるという寸法だ」と。律義に働いている農民の意識・道徳観の問題を理論的実践的にどう考えたらよいか。

兵士の或る指導者はこういう見解を述べている。われわれのあいだで、帝国主義軍隊は反人民的な戦争目標をもっているから道徳的な戦闘性をもちえない、これに反し、社会主義軍

隊は高貴な道徳的精神をもつものだ、といった意見がみうけられる。しかしファシズム軍隊の兵士が素晴らしい勇敢さを発揮したのは事実ではなかつたらうか。この兵士が本当に社会主義軍隊の兵士にかわるためには、ねばりつよい教育がおこなわれねばならない。いぜんに自分が果たした客観的役割がどんなものであつたかについて火のでもような羞恥をかんじ、反帝のたたかいのなかで屈辱をつぐなおうとするところに、兵士の道徳的回心が成立する。こういう道徳は軍隊内部における、軍隊と人民とのあいだにおける統一という客観的条件があつてのことであり、帝国主義軍隊とそこがちがうのだけれど、体制がかわれれば道徳も変るといふことはできない。

そのほか青少年道徳、家庭道徳、性道徳等にかんする報告書をみてもおなじようにふい道徳がいかにねずよい力をもっているかということ、それとの斗争はあたらしい道徳の建設なしには不可能であることを指摘する点で共通している。

こういう現実社会の実情についての観察意見等の分析吟味なしには倫理学は思弁哲学に墮していくにちがいないと考えるとき、Klein の理論的問題提起は正当な手続きをふんだものといえるだろう。

## II

Klein は倫理学の課題と対象を論ずるさいにまず、これまで社会主義理論家のあいだで一般におこなわれてきた通念にたいしかなりきびしい批判をくわえている。それは道徳はイデオロギー又は社会意識の一形態であるという見解である。もちろん史的唯物論の立場にたつかぎり、この命題のおもみは重大であつて、これをかんとんにあしらつておるといろいろな観念論におちこむことは周知のとおりである。したがつて Klein はこの命題を哲学的一般的定式とよび、いわば研究方法論としての意義を確認している。

「道徳が社会意識の一形態であるという定式は、道徳が社会において歴史的に発生し消滅したものであること、道徳が社会に依存してその内容機能において社会的歴史的にいつも具体的に規定されていることをいいあらわしている。さらにこの定式は、道徳が社会の上部構造のその他のすべての形態とおなじように階級に分裂した社会では階級の性格をもち党派的であること、道徳がそのさまざまな発展段階で一定の社会階級集団または階層の実践的な目的・利益および要求を表現して、これを正当化しようとしていることを意味している」それゆゑ道徳の特殊性を探求するいまの課題もこの哲学的定式を前提にしないで解決されるものではないというのが Klein の立場である。かれはこの方法を明確にするために、史的唯物論以前の倫理学のすべてにみられる方法論上の欠点を指摘する。それをひとくちにいえば、道徳を社会の外側の原理から説明しようとする点である。それがいちばん目立っているのは、Hobbes からはじまりイギリスの市民社会で発展し Kant で仕上げられた内面主義の倫理学である。それは卒直に資本主義的個人主義に対応しており、原則的にいって、社会以前の個人を実体化する考えを、いろいろのニュアンスにおいて示している。しかしその他の、倫理学をそんなに倭小化しなかつた哲学体系においても、社会の外側に道徳原理をもとめた点はおなじであつた。しかし、道徳はあくまで社会のなかに社会とともにある。これが Klein の方法論。

しかしこの定式だけではあまりに一般的すぎるし、これでおしとおそうすると、まちがいになると Klein は考える。その要点はつまるところ道徳の Spezifik を問題にすること

ができない点を指摘するのだが、Klein の議論のなかで一般的にいてもおもしろいと思われるのは、道徳イデオロギー論だけでは、第一に社会主義における進歩性と道徳性の統一を不十分にしか評価できないこと、第二に社会主義建設における諸事業の独自性多様性の意義を軽視することだと論じているところである。

道徳イデオロギー論では、いつの時代いかなる社会においても、社会発展の必然性に合致した意欲と行動が正しいと規定される。道徳性を進歩性で割り切っていくのである。それはまちがいないものようだが、なお腑におちないものを筆者などは考えさせられてきた。たとえば封建制にくらべて資本制はより発展した社会である。それゆえ原始蓄積期におけるブルジョアの意欲と行動は進歩的であり、したがって道徳的に正しいものである。こういう認識にぜんぜん問題はないだろうか。Klein はつぎのように述べている。

「全体として歴史的にみれば、道徳はうたがいがなく或る社会構成体から他の社会構成体へとより高いものに発展していった。しかし歴史的な意味で正しく且つ必然的であるものは、そのときどきの支配者がその被抑圧者被搾取者にたいしてとっている具体的な実践的道徳的行動とはまったく異なるものである。たとえば資本の登場とその権力奪取が歴史的に必然的合法的であり、歴史的な意味では道徳的に正しかったにしても、なおあくまでも、資本が<頭のさきから足のつまさきまであらゆる穴から血と汚物をたらしながら> (Marx) この世に出現したことは、道徳的見地からみるというまでもなく絶対に正しくないことである」

この Klein 提言はたいへん大きな問題提起になるだろう。考えてみるとこれまでの倫理学で個別的利益と普遍的利益の絶対的統一を説かなかったものは殆んどない。あれはなぜだろうか。ところで私有財産制にもとづく階級社会においては上述の二原理がひとつになることはできない。これは科学的現実である。倫理学者のいう統一はどうしても観念的であるほかなかった。それゆえいかに比較的進歩的なものであっても、かならず一方では道徳的退歩とむすびついてきた。社会主義社会になって進歩性と道徳性が統一される可能性がうまれたのである。過去の階級社会における道徳の歴史もこの到達点から見返えされ解釈されていていいし、そうしなくてはならないのではあるまいか。こういう社会主義的現実にはアクセントを置いて注意されねばなるまい。たんに進歩性で道徳性を割り切るのでは後者はほんらい自立の意味をうばわれてしまうのではないか。道徳イデオロギー論は道徳解消論につうじるが、そこで定着してはならない。

社会的発展の反映を道徳というなら、社会意識全般と道徳とはおなじものとなり、これは見方によれば、汎道徳論になる。いずれにしても問題は、とくに歴史的発展に沿って社会の全領野で自由な発展の可能性ができた社会主義のもとでは、それぞれの領域の特殊性、具体的任務が現実的に位置づけられねばならない。道徳イデオロギー論だけではそれができない。

それでは道徳の反映する特殊的側面とはどういうものか。これについて Klein はつぎのような定義をあたえている。すこしわかりにくいものであるが、重要である。

「私はこの側面をさしあたり一般的に、人びとの社会的および個人的共同生活の諸々の道徳的な関係と価値の総体と規定したい。特殊的形態としての道徳意識は、社会的存在一般を反映するのではなく（それはすべての形態の社会意識のおこなう機能だ）、社会生活のなかの特殊的な道徳的側面を反映する、つまり、社会生活のなかで、社会的存在者としての人間

・共同体で生きるものとしての人びとが行うところの協同生活協同活動にとって善いもの悪いもの、価値あるもの価値のないもの、を反映するのである。das was im gesellschaftlichen Leben für das Zusammenleben und Zusammenwirken der Menschen als gesellschaftlicher, in Gemeinschaft lebender Wesen gut oder schlecht, wertvoll oder nicht wertvoll ist.

私はこの側面のために道徳的価値という概念を使用したい。しかしそのさい価値とは生活の内部でこれを肯定する価値、否定する価値として具体的に存在し、生きてはたらくものなのである」

ずいぶん苦しい文章である。道徳的価値をいわゆる価値哲学でいう自立的観念的なものとまちがわれぬ工夫をしていると思われる。それは客観的であり、そのときどぎの特殊な社会の性質、たとえば資本制封建制社会主義制とともに存在する。これによって人間の主観的道徳能力を軽視するというわけではなく、むしろその現実的諸条件からこれを科学的に説明することが問題なのだ、と Klein は説いている。いうならば人間の主観的価値は客観的価値によって説明されるのである。後者は一定の社会関係の所有する特殊な道徳的質というべきものである。こういうふうに考えると倫理学の対象が独自のものであることがわかり、その仕事の意味もしだいに明瞭になってくるだろう。実践的意義としては、道徳的規範を道徳的価値をふまえてつくりだし、しかもそれを実現することが可能となることがあげられよう。道徳にかんしても例の Spontaneitätstheorie を後退させることができる。労働者階級の Klassenkampf はたんに歴史的に必然であるばかりではなく道徳的に善であるはずである。そうであればこそかれらは社会主義の事業のために高貴な徳、連帯、献身、誠実等々を発展させることができるし、事実がこれを実証している。これを一般化する理論が立ちおけているだけである。

「なるほど、われわれは、社会主義の建設が歴史的必然であること、その実現のために経済的法則を認識し適用しなければならないこと、社会主義的所有を擁護し、労農国家をつよめること、自分たちも社会主義の祖国を愛し防衛しなければならないことを人びとに説明してはおる。これは正しいし必要なことだ。しかしここにとどまってはならない。さらに社会主義が勤労者にとって善であり貴重でありまた何故そうかということ、勤労者が歴史的に提出された任務を道徳的義務としても理解し実現しなければならないし何故そうなるかということ、これを勤労者に説明しなければならない」

### III

前節で Klein の見解を筆者の理解したかぎりにおいてその要点を紹介した。これをめぐって直接的間接的に諸家の評論があらわれているわけであるが、大別すると Reinhold, Schmollack, Miller などは Klein の積極的意義をみとめ、Loeser, Boeck, Olivier らは批判的である。筆者としては前者のほうに比較的に説得的なものをみとめるものであるが、Klein 説をすっきり理解することもできない。そこで主として前者の論説を重要な参考資料として Klein 説の理解をふかめてみたい。批判家のうちもっとも論争的なのは Loeser である。しかし Boeck や Olivier らもこれとよく似ている。大づかみにいうならばこのひとたちはだいたいにおいて技術主義的・客観主義的であるとおもわれる。

批判家たちは、ひとくちにいって、Klein の「客観的価値」という概念をなかな

か容易にうけいれない。Loeser は、道徳的価値が客観的であるとか、一定の社会関係を示すとかいうのは、道徳がほんらい主観的意識的なものである以上原則的におかしなことではないかと考える。Klein は社会主義社会の生産関係あるいはその財産関係は社会発展の歴史の必然性に沿っているだけでなく、いわば *an sich* に善価値であるようにいう。しかし善悪の概念は価値判断にぞくし、意識のはたらきである。それゆえ社会主義は善なりというとき、それは価値判断であり、歴史的發展の必然性を客観的基準として成り立つものである。社会主義的財産関係それ自身が善というようなものではない。歴史的發展過程のなかで、社会主義体制のうちに必然性に合致しないものがでてくれば、それは悪となるはずだ。およそ社会は、前記の客観的価値基準（生産力の進歩）にてらして、進歩的促進的なものと保守的阻止的なものの矛盾をふくむものであり、前者の反映が善、後者のそれが悪ということになる。この道理はこれまでの階級社会の歴史、その道徳の歴史をみるばあいさらに明瞭にあてはまる。Klein 流に考えると、私有財産制の社会は *an sich* に悪であることになるだろうが、私有財産は善くも悪くもない。むしろそれに進歩的促進的なものが見出せるときには、たとえ被搾取者に対して悪となる面があったとしても、それは善なるものといわねばならない。善悪の価値評価において客観的基準となるものは、なんといっても社会発展の客観的・法則性である。

このような Loeser の見解は Klein からみれば、例の道徳は社会意識の一形態であるというこれまでの通念に帰着するだろう。Boeck が *Sitten und Gebräuche*（風俗習慣）を道徳の特殊領域であると規定しながらも、それらは社会的階級的意識の形式にすぎないとして、つまるところ、倫理学の対象は客観的社会法則そのものであるといったのもおなじ趣旨である。これらの批判者からいえば、Klein は社会的存在と意識との区別をあいまいにして、意識形態としての道徳の歴史的社会的性格をぼかしてしまうことにならざるを得ない。それは形而上学への逸脱につうじる。史的唯物論に忠実であれば、Klein のように存在的に道徳の特殊領域をのこしておこうとするのは腑におちないことになるのだろう。これは理解できる。

たしかに道徳の史的唯物論的解釈すなわち社会科学解釈は、道徳の領域をいちおう仮定し承認しておいて、あとで否定してしまうというたいへん弁証法的な性質をもっている。それはひっきよう道徳をないものにより倫理学を否定し、それを社会科学に解消するともいえよう。もったいぶった道徳は消滅し、認識がそれにかわるということになる。たしかに資本主義体制内における大衆が圧倒的なブルジョア道徳とたたかうさいに、こういう道徳解消論が積極的意義をもったし、もちつつあるのはまちがいない。

しかしながら道徳解消論は、他の見地からいえば、道徳を客観的歴史法則の認識とすることによって、すべての認識をひとまとめにして道徳とするわけだから、逆に Panmoralismus 汎道徳主義になってしまうということもできる。しかもこうなったときには、逆説的ないいかたではあるが、それは微妙に歴史に対する観想主義的姿勢とむすびつくであろう。なぜならば、実践は一定の発展段階における、しかも一定の領域における社会の認識にもとづいた政策とむすびつかなくは原則的にいって空虚であろう。そうだとすれば、いたるところに適用されるが特殊化の原理をもたない啓蒙教育を説くにとどまる汎道徳主義が本当に実践的であり得ないことになろう。こういう傾向は、建設をいそぐ社会主義国の多くの活動家にとって不満足なものであり、やがてがまんのないものと考えられでも、これまた不

思議ではない。Loeser の Klein 批判の反批判をおこなった Miller はいわばそういう不満を表明していると解釈されよう。Miller は、Loeser があらゆる認識を道徳にしてしまう見地から、道徳によって社会の矛盾を解決し新しい社会関係を創造するのだと論じている点を批判して、それは道徳教育の重要なことを指摘したものととればわからないこともないが、むしろ道徳の過大評価におちいったものだと言っているのは上述の事情を示したものでろう。またこうもいえる。Loeser のばあい、あまりに抽象的な政策主義か汎道徳主義かいずれかに一辺倒するのではないか。しかし道徳と政策との相互媒介性を確認することは重要であって、道徳の特殊性はそういう確認のうえにたって理解されるよりほかないだろう。

ところで、道徳を政策との交互作用または相互媒介のなかで位置づけようとしたのが Klein の意図であったのではなからうか。すくなくともその方向を示唆している点にその積極的意味があったと解釈すべきだろう。かれの道徳価値の客観性はひじょうにわかりにくい。これを理解するには Klein が社会を生産関係の土台からつかむという史的唯物論の原則をとりながらも、経済主義や技術主義に偏向しないで、社会を多様な社会的諸関係の複合的統一としてとらえようとした点に注意すべきだろう。はやい話が、かれのたえず念頭においたものは D. D. R. の生産関係そのものであろうが、それは SED の V Parteitag でつぎのように「定義」されているものである。「D. D. R. の社会主義的生産関係は、人民所有の経営の生産過程における、権力が労働者階級にある国家における、勤労者たちの間柄である。それは、労働成果の増大と生活改善の利益の共通から生れるところの、同志的支持と相互扶助との間柄である。それは兄弟の間柄、階級的同志の間柄である」

この定義にいう生産関係とは生産手段の社会的所有という経済的關係を土台にしながらもそれとからみあった独自の人間関係であることに注意すべきだろう。brüderliche, kameradschaftliche Beziehungen というものが、この生産関係の特殊な道徳的質 spezifische sittliche Qualität を指示しているだろう。こういう社会の道徳的特質が客観的道徳価値といわれるものであり、もろもろの客観的道徳的価値または道徳意識の根底或るいは源泉となるものだというように解釈されるだろう。そこでひとつの生産関係には特殊な客観的道徳的価値があり、そのもとでのさまざまな人間関係にはそれなりに客観的道徳価値がある。たとえば社会主義のもとでの労働道徳はそれなりの特殊の人間関係の道徳的質としての客観的道徳価値から発生するのである。こう考えるならば道徳は社会主義建設のための具体的斗争の多様な側面から遊離しないで、いつもそれと密着したものとして、しかも独立な領域としてとらえることができる。そこではじめて社会主義道徳の具体的内容、諸原則、カテゴリー、その発展の法則を研究することができる。そこに真に実践的な道徳の見方がある。こういうのが Klein の解釈だろう。

ただこれまでの倫理学は、殊に Kant 以来、道徳的価値を人間の内面にみていく個人主義的思考方法になれてきたものには、Klein のいう客観的道徳的価値を、形而上的実体としてはともかく、唯物論的によみとるのがむづかしい。このことに関連して Miller がその理解をたすけるためには、史的唯物論にもとづく経済学で使用される価値概念と比較すると有益だろうと述べたのはおもしろい。周知のように使用価値と区別される価値は物的外被の背景にかくされた客観的社会関係、しかも特定の歴史的具体的規定をもったそれをいいあらわす概念である。それと同様に客観的道徳的価値の概念において重要なのは客観的社会関係だといえることができる。義務、連帯意識、責任その他の社会主義道徳の規範（これを主観的道徳

的価値または道徳意識といつてよい)は、一定の社会関係を根拠・源泉にしているカテゴリーである。それは人々相互にたいし、階級にたいし、団体にたいし、社会全体にたいする一定の姿勢を要求するものであり、つまり一定の社会関係を表現するものである。そしてこういう社会関係は、くどくいうようであるが、経済関係で割り切ることができない。もちろん土台の関係によって成立するものにはちがいないが、じっさいは相互媒介的なものである。道徳的なものは経済や政治と並列してあるのではなく相互媒介的に存在する。それゆえ道徳を社会関係の相互媒介の連関から形式的機械的にきりはなすのは形而上的であり、むしろそういう連関のなかで考えてこそ道徳の特殊性をとらえることができる。

客観的道徳価値を人間意識に反映したとき、主観的道徳価値が成立す。そしてこのものはいろいろ的道徳的直観、道徳的規範などといわれる道徳意識である。注意すべきことはこの反映がきわめて複合的な過程であり、けっして道徳意識だけとして反映がおこなわれるものでない。しかも道徳意識自身きわめて複合した過程であり、理性的反映と感性的或るいは感情的反映が相互に媒介しあうものである。たとえば階級にたいする誠実や責任感のようなものにしても、たいへん理性的な客観的道徳的価値の反映と、しばしば支配階級の政治的暴力にたいする深刻な憎悪の感情による反映とがたがいにからみあい媒介しあうというようなくあいである。

主観的道徳価値は客観的根拠をもっているが、しかも或る程度相対的の独立性をもつものである。それだから社会主義社会においてもブルジョア的または封建的な道徳意識でさえ残存してはたったり、また他方、むかし大衆のたたかいのなかで形成された道徳意識(連帯とか団結などの)が現在の労働者のなかに生きてつたわるということもあり得る。しかし、形式はともかく主観的道徳価値の根源をなすものは客観的道徳的価値である。社会主義道徳意識は社会主義的客観的道徳価値によつて善なるものであって、歴史的必然のみによつてそうであるのではない。ここが Klein の彼の批判家とちがう特徴である。

それゆえ Klein の立場からいえば、Loeser のように、社会主義のなかにも進歩を阻害するものとしての悪があらわれるはずだとあっさり考えるのは、社会主義社会の道徳的質を問題にしない平板な意見になるだろう。Klein を支持する Miller はこのへんを詳細に批判している。たしかに社会主義社会にも矛盾はあるにちがいない。しかしそこでの矛盾にはそれなりの独自の性質があることをみのがしてはならない。生産力の発達を基準とする進歩性と保守性との矛盾を公式的にあらゆる時代の社会に適用するだけでは抽象的すぎる。階級的敵対が歴史上はじめて否定される社会の道徳的性質を重視しなくてはならない。本当に人間的な間柄が展開される可能性は以前の社会にはなかった。それもわずかに被圧迫階級の仲間のなかに、それも全面的にではなく、展開されたものにすぎなかった。それだから社会主義的道徳価値の研究は歴史的社会的道徳の本質と歴史を本当に明らかにする鍵にもなる。人間の解剖学が猿の解剖学の鍵となる道理である。こういうすじみちを確認することは社会主義倫理学が歴史上の倫理学の総決算となる意味を知るための前提であろう。

しばしば社会主義社会の建設の過程であれこれの政策がまちがっていたといつて修正されることがある。こういう事実をみて、修正された政策は進歩的でなかったわけだから、つまりは悪い政策だったのだといえるだろうか。そうかんたんにいいきれものではない。この社会でも、たとえば労働者と農民、生産労働者と知識人、人民と指導者のあいだなどに矛盾はありうる。しかしその矛盾には独自の性質がありはしないか。いわゆる人民内部の矛盾と



というようなものを考えあわせてみるとよい。社会主義体制下の労働者がブルジョア道徳意識でもって労働に従事し、勤勉にはたらく農民が男女差別の意識をもち、知識人を排斥するからといって、かれらは悪い人間というわけではない。社会主義社会ではかれらはみな善人になる客観的条件にめぐまれているのである。しかしながら主観的道徳価値がその秩序における或る程度の独立性をもつことができるからこそ、それが客観的道徳的価値を正確に反映するように努力が払われねばならない。そこに教育の意義があるわけで、労働階級にたいする前衛の役割が非常に重要になってくる。Kleinの問題提起の積極的意味は倫理学を D.D.R. の社会主義建設のための現実的客観的任務との関連で把握したという点にあるといえるだろう。Klein を支持する側の論述はだいたい以上のようなものと解釈できるとおもう。

#### IV

Klein の提出した道徳論は今後さらにめんどりに仕上げられねばならないだろう。そのためには社会の各方面における人間の *Gemeinschaft* (その基礎的なのは労働におけるそれ) の実証的研究が必要であろう。つぎには客観的道徳的価値と主観的道徳的価値との関係つまり反映論をもっと詳細に規定しなくてはなるまい。多少の誤弊をおそれずいならば、Klein 説では道徳の *Ursprung* の問題が道徳的価値の *Kriterium* の検討よりも重視されているといえるだろう。それは具体的な道徳的規範の計画的設定というような教育活動の意義を合理化するのに寄与するだろう。しかしながら、客観的道徳価値は主観的道徳価値に対してはなんらか超絶的なものとなるはずであるから、理想的観念的な「意味」として固定化される傾向もまわれうることだろう。そこで存在に対する意味の独立を不用意に設定するようになると、どうしても観念論への傾斜がでてくるかもしれない。そこに、たとえば官僚主義のでてくる可能性があるのである。

それだから、道徳的価値の *Kriterium* の研究を倫理学の根本問題にしておこうとする見解は、あとをたたないで繰り返し主張されるだろう。それは道徳解消論になってしまう傾向をもっているにしても、官僚主義をふせぎ、それを批判する役割をもつともいえるのである。さいきん *Tschecho* の *Engst* という新進哲学者が「科学としての倫理学」(邦訳明治図書) という労作を出しているが、著者は徹底的に道徳的価値の客観的基準を追求している。社会主義的実践が客観的社会進歩の科学的認識にもとづくからこそ誰でもそれに参加しなくてはならない。道徳的価値は客観的真理にうらずけられるもので、党派的相対性を越えたものと論じている。これなども、前に紹介した *Loeser* とおなじ路線の道徳論を固執している例である。党派的立場や主観主義をいましめる意識的な志向さえみられる。

いまわれわれの問題にしている倫理学論に関連して故戸坂潤先生の仕事について附記しておきたい。史的唯物論による道徳論はわがくにではとくべつすくない。戸坂の一連の道徳論(三笠書房刊「道徳論」はその綱要的著作)は、筆者の知るかぎり、意識的にとりくんだ唯一のものではあるまいか。かれの問題のたてかたは或るいみで Klein と似ている。それはあの時代なりにいわば社会主義道徳の建設をめざしたとても意欲的な労作である。

戸坂もまた道徳をイデオロギーとみていくだけでは、道徳研究の必要充分な条件をみたしていないというのである。道徳を社会意識の一形態として解消してしまったら、固有に道徳的なものを見落すのではないかと考えた。その固有な道徳とは何であるか。それは、ひとくちにいえば人びとがどんな場所で働き生きていくときにも所有する生活意識のことである。

それは道徳をイデオロギーとしてとらえる社会科学的（史的唯物論的）認識とべつのものではない。それは科学的概念が「一身化され自分というものの身につき感能化され感覚化されて生きてはたらくものことである」と規定される。それゆえ原則的にいえば、道徳＝認識説を補強しただけであった。戸坂はこういう生活意識をいわば道徳の固有な観念であろうといい、それは文学が対象とするいわゆるモラルに相当するだろうと説く。

いまの問題に関連していうと、こういう見解はあくまでも道徳に固有の領域をみとめない立場である。もしも客観的道徳価値が承認されるならば、とうぜん道徳的規範やその他の道徳的原則、徳目というようなものもみとめられ、社会主義建設のために独自の役割をもつことができるようになるだろうが、これは戸坂には理論的にゆるぎされないのである。生活意識をかれはフランスのモラリストに因んで「モラル」と名づけているが、それは道徳ぶつたことを否認するところに真の道徳をみるという意味においてそうよばれるにすぎない。「科学的認識の上での論理の欠乏は道徳意識の上での節操の欠乏に対応する」というように、認識はあくまでも道徳の精髓にほかならない。

このような戸坂の見解は Klein を批判する諸家とおなじ客観主義的なものといえるだろう。しかし、一般に戸坂哲学のすべての領域についていえることだが、ここでも不思議な柔軟性が指摘されうるとおもわれる。すなわち、かれの生活意識＝道徳論は Klein の客観的道徳価値論と調和できる要素をもっているかもしれない。というのは生活意識は、一面では教養人的文化的自由主義と和解するようでありながら、他面では「階級闘争や産業などを踏みわけてわたってき、そこで発散した粒々たる汗か脂の結晶のようなもの」でもあったのである。それは身辺小説的なものではなく、いっさいの行動において理論と実践との統一を原則とする見地から着想されたものであったとおもわれる。前述の論理欠乏＝道徳的無節操説にしても、たんに知的啓蒙主義の立場からではなくて、認識における科学性と党派性の統一を前提にしたものであったに相違ないことは、ほかでもないかれの生涯が実証しているだろう。そればかりではない。

科学的概念の生活意識への拡張についてのかれの研究と思索は貴重である。本稿で紹介した外国のどの哲学者も戸坂にはおよばないとおもわれる。Klein において、道徳意識と客観的道徳的価値との関係はどうしても反映論或いは認識論の研究なしにはすまされないはずだが、その思索は貧弱というほかはない。戸坂は科学的概念を生活意識にまで飛躍させる論理を探究した。これを道徳論的にいうと、社会的個人（個人）と自我（この私自身）との関係を考えたのである。そのさいにたいへん有益な唯物論的認識論の適用が示されている。

道徳意識について語ることができるときはひとは同時に自分自身について考えているのでなければならない。ところで戸坂は自我を個人の自覚或いは社会的個人（個人は社会関係の *emsemble* である）の反映の意識作用として規定し、これを存在の秩序にたいして意味の秩序にぞくするものと考えた。意味は意味同志のあいだで連関をもっており独立して交渉をたのしみ、ともすれば存在の根底をわすれるほどである。戸坂は意味連関の交渉をみとめつつも、その存在による制約をわすれさせないで、そうすることによって意味の真実の役割を保証したとすることができる。道徳意識においてかならず意味の秩序が問題になる。自分自身を探究するときにはかならず人類そのものとの交渉がある。むしろ人類そのものとの交渉することによって自分自身が真に自分自身となる。義務を問題にしない道徳意識はないが、義務においては意味としての自分自身と人類が合致し、そのことによって義務が私そのもの

の義務になるというぐあいではないか。もちろんこれらいっさいは私の個人、社会的個人つまり社会の土台から離れたならば空想になってしまうのだ。観念論はこの空想の魅力によるめぐところに成立するのではあるまいか。

そこで Klein 説においても、自分(個別)―客観的・道徳的価値(特殊)―人類(普遍)の相互関連を説明しなくてはならないはずである。かつて故田辺元先生は以上三概念のいわゆる絶対媒介を説かれた。筆者自身もほぼそういう方向で考えていたものである。しかし、この絶対媒介はカント的実践をモデルにして考えたものであったので、意味の世界と存在の世界とを混同したために破産してしまった。あれほど特殊の客観性を保証しようと努力しながら(田辺元「種の論理」)、特殊つまり種を意味に媒介されなくては存在の資格をもたないものとしてその自立的客観性を原則的にうばっていったということになる。はじめはほんのすこし空想に譲歩しただけかもしれない。しかし、そのために真の空想の偉力にめぐまれないかつたともいえようか。なぜというに、おそらく客観的・道徳的価値自身の自覚というものは社会的実践にうちこんでいく人びとに宇宙的な義務のよろこびをあたえており、それは真の空想力を前提にしているともいえそうだからである。(昭和41年9月30日 受理)

### Summary

#### Untersuchungen von der Spezifik der Ethik (Teil I) —Bespprechung der philosophischen Diskussionen in D. D. R.—

Yoshiharu WATANABE

Wie die Spezifik der Ethik als einzelne Wissenschaft zu bestimmen sei, dies ist die Hauptaufgabe des Verfassers. Um die Bedeutung des Problems klar zu machen, behandelt er hier in der einleitenden Studie, die neuerlich in D. Z. f. Ph. erschienenen Diskussionen von den sozialistischen Philosophen in D. D. R.

Zwei typisch verschiedene Ansichten sind dort bemerkbar. Matteüs Klein und seine Anhänger behaupten: der eigne Gegenstand der Ethik sei die spezifisch sittliche Seite des gesellschaftlichen Seins, "objektiv sittliche Werte", die den Moralanschauungen und Normen zugrunde liegen.

Loeser und andere Kritiker gegen Klein verteidigen die orthodox materialistische Auffassung der Moral, die nur als eine Art des Sozialbewusstseins erklärt werden muss. Im Grunde genommen, können sittliche Werte nicht "objektiv" sein. Die eigentliche Aufgabe der Ethik bestehe in der Erforschung der Gesetzmässigkeit, die den Kriterium des Sittlichen ausmacht.

Des Verfassers Erachtens ist dass Kleins Fragestellung ungeachtet der schwachen theoretischen Begründung sehr fruchtbar und dagegen die Ansicht Kleins Kritikers zur Bestimmung der Spezifik der Ethik etwa zu allgemein sei.